

アドリアン・バイエのラシーヌ評

柳, 光子
愛媛大学法文学部

<https://doi.org/10.15017/10030>

出版情報 : Stella. 19, pp.141-146, 2000-09-05. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



アドリアン・バイエのラシーヌ評

柳 光子

「コルネイユはあるべき人間の姿を描き、ラシーヌはあるがままの人間の姿を描く」¹⁾ という一文を含むラ・ブリュイエールの論評は、コルネイユの死から4年後の1688年に発表されており、同時代人による2大悲劇詩人の対比論として名高い。しかしこれに先立つこと2年、ロンジュピエールなる文人が『コルネイユ氏とラシーヌ氏の比較論』を世に問うていた²⁾。以後くり返し書かれていく対比論の口火を切った論考ということになるわけだが、これがある人物の依頼によって執筆されたものだという経緯はともすれば見落とされがちであるように思われる。若いロンジュピエールを説得し、最初の本格的なコルネイユとラシーヌの比較論を世に送らせた人物とは、17世紀の碩学として知られるアドリアン・バイエである³⁾。

バイエは1649年にボーヴェ近郊で生まれ、ラシーヌより10歳年少である。農家の長男という出自であったが、ボーヴェの神学校できわめて優秀な成績をおさめたため、20歳そこそこで同地のコレージュ教授に任命された⁴⁾。3年間教鞭をとったのち出家するが、それ以前から広範な読書に没頭するかたわら、自ら正体を看破した「匿名の作家たち」についての論考を著していた。僧となった後は、わずか300リーヴルの収入にもかかわらず時おりパリに出向いては書物を山と買い入れるため、水とパンのほかは庭でとれる野菜しか口にしないという生活に甘んじる。一介の助任司祭にすぎなかったバイエはやがてその卓抜した学識を認められ、1680年よりラモワニオン家に司書兼家庭教師として仕える身分となる⁵⁾。パリ高等法院の院長や検事を輩出したラモワニオン家は、学者や文人が広く出入りする場となっており、また蔵書の立派なことでも知られていた。バイエの司書として第一の任務は、その蔵書を整理分類し目録を作成することであり、早くも82年8月には仕事を完了している。学者たちがこぞって目録の閲覧に訪れ、高位聖職者や行政官のなかには写しを所望する

者もあったという。この仕事が基盤となって、『デカルト氏の生涯』と並ぶバイエの主要業績となった『作家たちの主要な作品についての学識ある人々の見解』が書かれたと見てよいだろう⁶⁾。この労作は大きな反響を呼んだためバイエは続編を書く意図をもっていたが、オランダ史や宗教論の執筆が要請されたこともあり、その刊行はついに実現しなかった⁷⁾。1706年、最後まで身分は一介の僧侶にすぎなかったが、当代きっての碩学、学識ゆたかな批評家として惜しまれながらラモワニオン夫人らに手厚く看取られパリに没した。

バイエが一日一食、睡眠は5時間、ワインも暖房もなしですませ、書齋を離れて街に出るのは週に一度だけという刻苦勉勵を重ねて後世に残した『作家たちの主要作品についての学識ある人々の見解』は、フランスにおける近代的文芸批評や文学史研究の誕生を告げる著作と目される。博覧強記と勤勉な資料収集にまかせた雑駁な項目の羅列にすぎぬという指摘もそれなりに当たってはいるが、彼の著作が文献学から作品解釈を中心とする近代批評への端境期にあって重要な役割を果たしたこともまた事実である⁸⁾。表題が端的に示すように、当初バイエは識者の見解を集大成することで批評を構成しようと考え、自身の論考は極力そこに交えない方針であった。そしてラシーヌの項目を作成するにあたり、彼とコルネイユとを比較するのが肝要との判断から対比論の執筆を依頼した相手がロンジュピエールだったのである。『学識ある人々の見解』に添付されたロンジュピエールの書簡からも『コルネイユ氏とラシーヌ氏の比較論』がバイエの依頼によって書かれたことは明らかであり、若いロンジュピエールは物故詩人と現役の詩人を比較することへの困惑を感じつつ執筆にふみきった心中を述べている。バイエは彼にいたく感謝し、四折本で13頁に及ぶ対比論を完全収録しているが、「誰々氏の言によれば」といったかたちで「学識ある人々の見解」を独自の文章に綴るという基本姿勢からすれば、かなり異例の扱いであったといえよう。

ロンジュピエールの対比論はコルネイユとラシーヌをとともに称揚しながらも、全体としては後者に好意的な内容になっており、これを簡潔にまとめあげたものがラ・ブリュイエールの論評となった感をあたえる⁹⁾。「コルネイユは自分の個性や思想に我々を従わせ、ラシーヌは我々の個性や思想に自らを合わせる」という見解から、両者がソフォクレス、エウリピデスにそれぞれ倣ったのであろうとする点にいたるまで、ラ・ブリュイエールの述べていることはす

べてロンジュピエールによって語られているのだ。ラ・ブリュイエールの無駄のない簡潔さは比類なきものであるが、ロンジュピエールの丁寧な論述も当時の読者には好評だったのではあるまいか。陳腐ととられかねぬ比喩の多用も、分かりやすいイメージをあたえ説得力を増す効果があったにちがいない¹⁰⁾。いずれにせよ、コルネイユとラシーヌのどちらに軍配をあげるかというやり方ではなく、両者の対比により各々の特徴を明らかにしようとする方法をいちはやく思いつき、適任と目星をつけたロンジュピエールに対比論を書かせたバイエの功績は大きいといえよう¹¹⁾。

最後に、ロンジュピエールの対比論の前後に付されたバイエ自身のラシーヌ作品評を概観しておこう。「作家ではなく作品を論じる」という姿勢の現れか、きわめて簡潔なラシーヌの略歴につづいて劇作品の全集についての記述があり、その後に2頁ばかりの全般的な論考が配され、ロンジュピエールの対比論への導入となっている。対比論の後には作品ごとの注解が7頁ほどにわたって施されている¹²⁾。ボワローやサン＝テヴルモンの言を引き、ラシーヌの「序文」を参照しつつ進められる記述のなかでとりわけ目をひくのは、演劇における恋愛についての論考である。悲劇が恋愛の情念を描き出すことの是非は17世紀の演劇論争の焦点のひとつであった。パスカルやニコルに代表されるジャンセニストたちの演劇断罪は、芝居に描かれる恋愛を引き合いに出しつつ、優れた作品ほど危険であるというパラドックスをくり返し指摘している。彼らほどの急先鋒でなくとも、演劇断罪派は激しい恋愛を描くことが悲劇の主要な関心事となっている時流を批判するのが常であった。自身も僧籍にありパリ高等法院ゆかりのラモワニオン邸に仕える身であることを思えば、バイエが彼らに近い意見をもつのは自然ななりゆきであろう。『イフィジュニー』の作者ラシーヌが恋愛を中心テーマとせずに見事な心理劇を創出したとする意見は、ピエール・ド・ヴィリエによって早々に述べられていた¹³⁾。バイエは『イフィジュニー』を評した部分でヴィリエの見解を要約しているが、『ラ・テバッド』についてもラシーヌの他の作品で主要な役割を担う恋愛がほとんど描かれていない点を特記する。さらに総論の部分でもヴィリエの論評を援用しつつ、「恋愛ぬきの悲劇、あるいはせめて恋人たちのあの甘く情熱的な恋愛を除いた悲劇」を称揚する言葉が認められるうえ、ロンジュピエールの対比論にわざわざ注を施し、ラシーヌが恋愛情念の描出に長けていることに逆説的な危険性を

指摘している点は興味ぶかい¹⁴⁾。こういった点からもバイエのラシーヌ評には、遺漏なく識者の見解をまとめようとする執筆姿勢のかけに、独自の視点から論を進める批評精神が内包されているように思われる。

註

- 1) LA BRUYÈRE, *Les Caractères ou les Mœurs de ce siècle*, «Des ouvrages de l'esprit», § 54.
- 2) ロンジュピエール (Hilaire Bernard de Requeleyne, baron de LONGEPIERRE) はラシーヌよりちょうど 20 歳年少、後には自ら劇作に手を染めるが、対比論を執筆したのは古代ギリシア抒情詩の翻訳者として文壇に登場したばかりの頃である。
- 3) バイエの生涯については、『作家たちの主要な作品についての学識ある人々の見解』第 2 版の校訂者ベルナール・ド・ラ・モノワによる «Abrégé de la vie de Mr Baillet» を参照した。Voir Adien BAILLET, *Jugements des Savants sur les principaux ouvrages des Auteurs*, revus, corrigés, & augmentés par M. DE LA MONNOYE de l'Académie Française, Paris : Chez Charles Moette, etc., 8 vol., 1722–25, t. I, pp. 3–28.
- 4) ボーヴェの学院では 1653 年から 55 年にかけて 13–15 歳のラシーヌが学んでいる。ランスロら師父たちは、愛弟子が文学および修辞学課程を学ぶにあたり、ポール＝ロワヤルと緊密な関係にあったボーヴェの学院を選んで送り出したのである。バイエが中等教育を受けた当時の学院も、ラテン語とギリシア語の教育にポール＝ロワヤル方式を採用し成果をあげていた。またコレージュ時代のバイエの読書は、古典からフランス詩にいたるまですべてポール＝ロワヤル方式により推奨されたものであったという (*ibid.*, pp. 5–6)。
- 5) バイエの就任は、『タルチュフ』を断罪した高等法院院長ギョーム・ド・ラモワニョンの死後である。剛直な司法官として名をはせたギョームが主催者となって特異な文学サロンが定期的に関開かれ、ヘレニストたちを集めていた事実については、戸張智雄『ラシーヌとギリシア悲劇』、東京大学出版会、1967 年、第 1 章第 3 節に詳しい。
- 6) 初版 (全 9 巻) は 1685–86 年刊。本稿で参照したのはド・ラ・モノワ改訂による第 2 版 (前註 3 を参照)。同版は「匿名作家たちについて」や「アンチ」——攻撃文を矢面となった作家・項目ごとにまとめたもので、古くはカエサルのカトー攻撃にまでさかのぼっている——などを新たに収録したほか、初版の誤りを修正、1686 年以降の作家たちの動向を加筆しているが、ラ・モノワは原文との混同が生じぬよう細心の注意を払っている。
- 7) したがってバイエによるラシーヌ評も 1686 年当時までが対象であり、存命中の作

- 家として扱われている。コルネイユは1684年に没し、翌年あとを襲って弟トマ・コルネイユがアカデミー入りするが、当時会長の任にあったラシーヌは歓迎の辞を述べるにあたり、感動的な大コルネイユ追悼演説を行った。バイエの論評はそうした出来事にも間髪をいれぬ反応を見せている。
- 8) Voir Arnaldo Pizzorusso, *Éléments d'une poétique littéraire au XVII^e siècle*, Paris: PUF, coll. «Perspectives littéraires», 1992, pp. 73-76.
- 9) 『カラクテル』におけるラ・ブリュイエールのコルネイユとラシーヌの対比は、やや後者に好意的であるとはいえ、コルネイユを貶めるものではない。しかしアカデミー入会演説（1693年）でのラ・ブリュイエールは、あからさまにラシーヌをコルネイユの上位に置き、会員たちの輿論を買った。演説刊行のさいにはその部分を削除するよう会員の大半が希望したが、会長ラシーヌがボシュエを介して彼らを脅迫したうえ国王にも直訴して、演説に修正が加えられぬよう画策する。これに対する反発でフォントネルが『コルネイユ・ラシーヌ比較論』を出版し、伯父にあたるコルネイユを全面的に称賛するという事件が起きた。
- 10) コルネイユの詩句は稲妻であり（目も眩むほどの閃光を発するが人心を暖めない）ラシーヌのそれは太陽（照らすと同時に暖める）、コルネイユは急流であり（流れが一律でなく時として実力を発揮していない）ラシーヌは大河（流れは一律で穏やか、常に包容力に富む）、コルネイユの美は彫像であり（より力づよく壮麗、雄々しく大胆さに富み、賛嘆の念を起こさせる）ラシーヌの美は絵画（より優雅で繊細、甘美な自然さに満ち、感動と傾倒をもたらす）、などの表現が見られる。
- 11) 「ラシーヌ氏の美点を明白にするには、コルネイユ氏の美点と比較するのが最良の方法である。劇場に足を踏み入れたことのない私はフランス演劇について経験が乏しく作品を読んだことしかないで、この2大作家の対比論を、私が大いに尊敬しているある人に依頼することにした」（BAILLET, *op. cit.*, t. V, p. 424）。ロンジュピエールは当時珍しかったギリシア語の達人で、この頃すでにアナクレオンやサッフォーの翻訳を刊行していた。またバイエが読者としてしか作品を知らない自分は適任ではないと考え、舞台を観た者の判断を優先した姿勢も評価されるべきであろう。
- 12) 作品論にあたる部分で扱われているのは悲劇のみで、喜劇『訴訟狂』は対象外である。なお『エステル』『アタリー』はこの時点では書かれていない。
- 13) 『イフィジェニー』初演の翌年（1675年）に当時イェズ会に所属していたピエール・ド・ヴィリエは『当代の悲劇に関する話題』を出版し、演劇のもたらす悪はことごとく恋愛から生じるのであり、誠実な恋人たちの美德ですら観客を墮落させてしまうと主張した。その彼がラシーヌの『イフィジェニー』に言及し、激しい恋愛を舞台上にのせずとも悲劇が成功をおさめうる証左としていた。
- 14) ロンジュピエールの「ラシーヌ氏は恋愛・恩愛・優しさなどの、愛情のこもった情念を扱うときこそ遺憾なくその本領を発揮する。同氏がとりわけ卓越しているのはこの点である」という論述に、「危険な長所」と注記している（BAILLET, *op. cit.*,

t. V, p. 431)。ニコルらの主張にきわめて近いものを感じさせる見解であるが、ポール＝ロワヤルの人士たちへのバイエ自身の言及は概して控えめであり、主として翻訳者の項において、彼らがフランス語の純化に貢献したことを高く評価しながらも、「国王允許を得た著作にかぎって論評する」と宣言するなどの慎重さが随所に見うけられる。